北海道教育大学学術リポジトリ
Hokkaido University of Education Repository
国立大学法人 北海道教育大学
HOKKAIDO UNIVERSITY OF EDUCATION

「J-POPにおける“永遠”について」のために

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-01-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西原, 千博 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00007392

「J－POPにおける〝永遠〟について」のために

西　原　千　博

I

安室奈美恵の「CAN YOU CELEBRATE ？」（作詞小室哲哉／作曲小室哲哉 1997／２／19　以下、曲名の後には作詞者、作曲者の順に表記する。また、発表はシングル、アルバムで早い方を表記する。）、浜崎あゆみの「Love ～ Destiny ～」（浜崎あゆみ／つんく　1999／４／14）、そして、出光興産のコマーシャルソング、この３曲がこの論の出発である。

1997年に安室は「永遠の言葉なんて　知らなかったよね」と明確に〝永遠〟を歌っていた。

Can you celebrate ？
Can you kiss me tonight
We will love long long time
永遠という言葉なんて　知らなかったよね

それに対して、1999年には浜崎が〝永遠〟を否定した。

ねえ　本当は　永遠なんてないこと
私はいつから　気付いていたんだろうね

しかし、〝永遠〟という歌詞はそれでなくなるわけではなく、2008年頃から「永遠を信じるほど　無邪気にはなれないけれど」とコマーシャルにも使われている。では、安室の前はどうだったのか、浜崎の後はどうだったのか、その点について確認してみたいということである。そこで、まずはインターネットの歌詞検索を用いて、〝永遠〟という言葉の使われ方について、調査してみたのである。なお、今回はあくまでも調査ということで、それについての考察にはいたっていない。（そのため、標題に「ために」と付した。）

この「CAN YOU CELEBRATE ？」については、というよりもこの時期に〝永遠〟という歌詞の曲が多くヒットしたことについては、すでに藤川大祐氏による指摘がある。藤川氏は、「歌謡曲の教育学　第13回（1998.4）「永遠」という言葉で歌う刹那の儚さ－広瀬香美「promise」－」（藤川氏のホームページによる。http://homepage2.nifty.com/dfujikawa）で次のように述べている。

このところ、「永遠」という言葉が使われるヒット曲が目につく。

GLAYの「HOWEVER」（作詞／TAKURO）は、「絶え間なく注ぐ愛の名を永遠と呼ぶ事ができたなら」と歌う。SPEEDの「WHITE LOVE」（作詞／伊秩弘将）は、「生まれたての愛を　永遠に大切にするから」と歌う。昨年12月に新

アレンジ版も発売された安室奈美恵「CAN YOU CELEBRATE ?」（作詞／小室哲哉）は、「永遠ていう言葉なんて　知らなかったよね」と歌う。話題を呼んだ日本テレビ系テレビドラマ「失楽園」の主題歌は、ずばりZARDの「永遠」（作詞／坂井泉水）で、「今の二人の間に　永遠は見えるのかな」と歌う。

そして、最近ヒット中なのが、広瀬香美の「promise」だ。速いテンポのマイナーな曲に乗せて、「永遠に愛してる　今日より愛してる　ずっと　Eternal Love」と歌っている。

（中略）

「永遠」が出てくるこれまでのヒット曲を、少し詳しく見てみよう。これらの曲は、「永遠」という言葉をたしかに使っているが、聴く側には「永遠」という言葉の虚しさの方が印象づけられるようになっている。SPEEDや安室が「永遠」を歌っても、若いためのもろさの方が目立ってしまう。

（中略）

広瀬の「promise」も、「永遠」を歌うことによって、逆に儚さを伝える。これまでの曲以上に、過剰なほど早口で激しい曲調で繰り返される「永遠」「Eternal Love」といった言葉が、逆に、スキー場に似合う刹那の恋を感じさせるのである。

「promise」は、ここ数年の広瀬の曲の中での最大ヒットとなっている。この曲が受け入れられているのは、不透明な時代で「永遠」が求められているためかもしれないし、逆に「永遠」の虚しさを人々が感じているためかもしれない。

ここで藤川氏が「『永遠』という言葉の虚しさの方が印象づけられる」、あるいは「逆に儚さを伝える」と指摘していることは注目に値する。ただし、藤川氏は「歌謡曲」というものがどのようなものかという問いに基づき、作品の社会的な背景などについて述べているのに対して、本稿では最初に述べたように、歌詞にだけ注目して、〝永遠〟という言葉について調査することを目的としたものである。そのために歌詞の具体的な分析や、その背景などについてはほとんど触れることはないだろう。また、先に述べたようにこの時期だけではなく、その後の、あるいはその前の、この言葉の使われ方に注目したいのである。

さらに、実は対象とする曲も違うのである。安室やGLAYの曲は対象とするが、広瀬香美やSPEEDの曲は対象としないのである。藤川氏は「永遠」ということで一纏めにしているが（実際に歌っている歌手や作詞家なども区別などしていないだろうけれど）、「永遠に」と〝永遠〟とは違うものだと考えるからである。「永遠」には二種類あって、単に時間の長さを示すものと、観念としての〝永遠〟とがあると考える。そして、広瀬香美の歌詞にある「永遠に」というのは、〝永遠〟ではないと考えるからである。

では、なぜ「永遠に」は〝永遠〟ではないのか。中学校の教科書に載っていて、現代の若者達ならば皆知っているだろう山川方夫の『夏の葬列』（「ヒッチコッ・マガジン」1962年８月）を例にして説明しよう。『夏の葬列』には次のようなよく知られた一節がある。

立ちどまったまま、彼は写真をのせた柩がかるく左右に揺れ、彼女の母の葬列が丘を上って行くのを見ていた。一つの夏といっしょに、その柩の抱きしめている沈黙。彼は、いまはその二つになった沈黙、二つの死が、もはや自分のなかで水遠につづくだろうこと、永遠につづくほかはないことがわかっていた。

ここに「もはや自分のなかで水遠につづくだろうこと、永遠につづくほかはないことがわかっていた。」とあるが、自分というのは有限の存在だからその中で「永遠につづく」ということは、理論的にはあり得ない。ここはあくまでも比喩的に述べているだけである。自分の思いを「永遠に」という言葉で表したということであり、つまりは〝永遠〟そのものの意味を踏まえたものではなく、ここでいう「永遠に」は〝永遠〟ではないのである。

しかし、ランボーの『地獄の季節』の中の「永遠」という詩の一節はどうだろうか。

また見つかった、
何が、
永遠が
海と溶け合う太陽が

（小林秀雄訳『地獄の季節　岩波文庫』）

この詩について野村喜和夫氏は次のように述べている。

「永遠」は、ランボーが書いた数ある韻文詩のなかでも、「母音」「酔いどれ船」とともに、たぶんもっともよく知られた詩篇だろう。とくに、最初と最後に置かれたリフレインは、（中略）極めつけのランボー的詩句として人口に膾炙している。

（『ランボー『地獄の季節』詩人になりたいあなたへ』みすず書房　2007年７月）

小林秀雄の訳は1930年に出版されているが、それ以外にも中原中也や堀口大学の訳などでもよく知られている。中島敦も『真昼』（『南島譚』1942年　今日の問題社刊）で、この一節を引用して「見付かったぞ！何が？永遠が　太陽と溶け合った海原が」と訳している。ここでいう〝永遠〟はまさに観念としてであり、自分の外に客体として存在しているものだと言えよう。これに対して「永遠に」というのは、自分の延長線上に目指すものとして仮定されているに過ぎないのであり、時間の長さを示すだけなのである。ランボーの〝永遠〟は瞬間的なものかもしれず、それは時間を超えたものとして現れるのである。

前述のように、広瀬香美のものは「永遠に」であり、時間の長さを示すだけなのである。一方、安室奈美恵の「永遠という言葉なんか」というのは、この観念としての〝永遠〟に近いものがあるのではないか。無論、この詞の前に「long long time」とあって、この〝永遠〟も二人の愛が〝永遠〟だ、という時間に係わるものを示しているとも考えられる。また、GLAYの曲にしても「絶え間なく注ぐ愛のなを」とやはり時間の連続を示している。ZARDにしても「二人の間に」と愛が〝永遠〟であることを示していると解釈できる。つまり、完全に観念としての〝永遠〟を歌っているとは言い難いのだが、「永遠に」と言う言葉よりも、時間というもの

を超えたものとしての〝永遠〟に繋がるものがあるのではないか。少なくとも、〝永遠〟というものを客体として捉えていると考えられるのである。すなわち、〝永遠〟についての調査といっても、それは単に「永遠」という言葉について調査するということではなく、観念として使われている〝永遠〟について調査するということである。調査というよりもそのような例が、それこそ「見つかった」らいいなということである。あえて言えば、それは、〝永遠〟のなれの果てを探すことなのかもしれない。

なお、言うまでもないことだが、このような調査はこれまで一度もされたことはない。というよりも、Ｊ－ＰＯＰの歌詞についての考察自体ほとんどされていない。この点については、すでに見崎鉄氏が『Ｊポップの日本語－歌詞論－』（2002年７月　彩流社）で指摘している。

歌というかたちではあるが、そこでは同時に大量の言葉が送り届けられている。歌詞が大量に生産されている。だがその歌詞についての批評は、供給量の割には極めて少ない。

さらに、これに続けて次のように述べている。

一方で、本を読まなくなった若者にとって、言語の作品として歌詞が持つ重みが相対的に増している。若者は本棚に詩集の代わりにＣＤを並べている。彼らはＣＤの歌詞カード、テレビの歌番組やカラオケのモニターに流れるテロップに「詩」を感じている。

この後半の指摘は本稿執筆の理由にも通じる。現代の若者において、〝永遠〟という言葉は本ではなくＪ－ＰＯＰの中にこそ見出されるものなのである。実際に彼らがそこに「詩」を感じているかどうかは疑問だが、現代において〝永遠〟について考えるなら、小説や詩集ではなく、Ｊ－ＰＯＰの歌詞に注目する方が実態に合っているのではないかということである。

もう一つ、調査を始める前にことわっておかなければならないことがある。本稿の標題であるＪ－ＰＯＰという言葉についてである。Ｊ－ＰＯＰとは何を指しているのか？

烏賀陽弘道氏は『Ｊポップとは何か－巨大化する音楽産業－』（2005年４月岩波新書）で、まず、この言葉の使われ方の現状について、

本や雑誌によっては、1960年－1970年代初期のグループサウンズやフォークまでさかのぼって「Ｊポップ」に含めているものもある。（中略）「Ｊポップ」という呼び名ができたのが1988年末ごろだから、正確な言葉の使い方とはいえない。

と述べた後で、この言葉が成立した経緯について詳しく述べている。

そんなＪ－ＷＡＶＥで邦楽をかけるコーナーを発足させよう。洋楽しかかからない局で邦楽がかかれば、音楽をよく知っている人たちのおめがねにかなった、というイメージがついてかっこいいんじゃんいか。（中略）そのコーナーにどんな名前を付けるのか。英語の語りの中で「日本のポップス」をどう呼ぶのか。

「ジャパニーズ・ポップス」は長すぎてアナウンスしにくいし、直訳にすぎる。

「ジャパン・ポップス」では「和製ポップス」と大差なく、芸がない。

というようなことで、誰かが「Ｊポップ」という名前を出してそのように決まったと言うことである。それが、「関係者の記憶ははっきりしないが、88年末か89年初頭のこと」だったのである。本稿では必ずしも1988年以降の曲だけを取り上げるわけではないので、「正確な言葉の使い方」ではないが、先に述べてきたように中心となるのは、1997年以降なので、Ｊ－ＰＯＰといっても差し支えないだろう。まあ、個人的には「日本のポップス」という言い方の方がふさわしいかとも思う。

さらに、最初に安室奈美恵の「CAN YOU CELEBRATE ？」と書いたが、歌詞を問題とするならそれは作詞をした小室哲哉にこそ注目すべきで、言うならば小室哲哉の「CAN YOU CELEBRATE ？」と言うべきかもしれないということである。しかし、あくまでも曲の主体は歌手にあるという立場にたって、歌手の名前と曲とを繋げて表記することとする。安室奈美恵の「CAN YOU CELEBRATE ？」と言う人はいるが、小室哲哉の「CAN YOU CELEBRATE ？」と呼ぶ人は希なのだから。**(注１)**

Ⅱ

現在は歌詞についてインターネットで全曲検索が可能になっている。ただし、著作権の問題があるので印刷やコピーなどはできない。本稿では収録曲、約110,000曲のUta－Netで、「永遠」という言葉について検索することとした。(特に、Uta－Netを選んだのは他意はない。)

歌詞全文検索で「永遠」を検索すると、6596曲あった。(2011年６月10日現在。)これらの曲の歌詞を調査することになるが、実際にチェックすると「永遠」という言葉が出てこない曲も何曲かあるので、実際には6500あまりの曲の歌詞を調べればよいということになる。なお、検索は「永遠」という漢字で検索をしたもので、例えば「とわ」と読んでいても問題としない。この「永遠」を「とわ」と読むことについては、井上ノリミツ氏が『Ｊポップな日本語』(2010年７月　主婦の友社）で次のような指摘をしている。

> Ｊポップな漢字の代表選手。辞書的には「永久」と書けば「とわ」なのに、わざわざ「永遠」とすることにはあえて追求しない。主な意味は変わらぬ愛を誓うこと。または変わらぬ愛を祈りに変えること。それはフォーエバーで、百年たっても、千年たっても、時空を超えていくのである。まるで「火の鳥」のように。

ここで、〝永遠〟が恋愛に係わるものに限定されて述べていることに注意したい。実際にほとんどの歌詞で〝永遠〟と呼ばれる対象は恋愛に関するものである。つまり、〝永遠〟という言葉を『愛』という言葉に置き換えてみても意味が通じるということでもある。(音数が違うから歌うのは難しいだろうけれど。)逆に言えば、「愛」に置き換えのできないものこそ本稿の探している〝永遠〟ということにもなる。この点で言えば、先の「CAN YOU CELEBRATE ？」にしても「HOWEVEWR」にしても恋愛に関してのものであった。安室の曲では「愛」に置き換えることもでき

そうである。しかし、〝永遠〟が歌詞の最初の方に出て来るために、愛というよりも〝永遠〟そのものが聞くものには強調されている。このあたりが曖昧(グレー)なゾーンであり、確実に観念としての〝永遠〟を歌ったものか、愛の意味で歌っているものかを明確にすることはできないところもある。また、当然ながら聞く側にとっての印象ということがこの場合大きく影響するわけで、歌全体の中で〝永遠〟がどのような位置にあるのか、コンテクストも踏まえて考察していく必要がある。なお、すでに考察の対象から外した「永遠に」の方はほとんどが愛を指すもの、踏まえたものだということが明確に解る。因みに、「永遠に」で検索すると2429曲、これとよく似た言葉で「永遠の愛」などの用例になる「永遠の」では1562曲あった。当然これらは本稿の対象から外されることになるのだが、先に述べたように、常にグレーゾーンがあり、例外的なものがないわけではない。例えば、森山直太朗の「さくら」(森山直太朗・御徒町凧／森山直太朗　2003／3／5)。

〜

いざ舞い上げれ　永遠にさんざめく
光を浴びて

この「永遠」は先にあったように「とわ」と歌っている。「永遠にさんざめく」という言葉の意味がわかりづらく、一つには恋愛とは関係ないものとして考えられることもあって、〝永遠〟(とわ)という言葉が印象づけられる。しかし、観念としての〝永遠〟というよりは、時間の長さを示す〝永遠〟ではある。やはり曖昧としか言いようが、このような例がある場合は、それについても触れていくこととする。

具体的な曲を挙げる前に、客体としての〝永遠〟の典型的な例として、また〝永遠〟の比較的早い使用例として、荒井由美(松任谷由実)の曲をあらかじめ挙げておきたい。彼女の曲の中でも、最も注目すべきは「朝陽の中で微笑んで」(荒井由美／荒井由美　1976／11／20)である。

朝陽の中で微笑んで
金のヴェールのむこうから
夜明けの霧が溶けはじめ
ざわめく街が　夢をさます

〜

宇宙の片隅でつぶやき合う永遠は
幻だと知っていても

朝陽の中で微笑んで
形のない愛をつなぎとめて
つなぎとめて　つなぎとめて

荒井由美はこの前にも「あなただけのもの」(荒井由美／荒井由美　1974年10月)で「永遠という言葉を　今まで信じなかった」とも歌っていて、かなり早い時期から〝永遠〟を歌っていた。この曲では、「宇宙の片隅でつぶやき合う永遠は」と〝永

遠〟が客体化されている。Ｊ－ＰＯＰにおいて（この曲はこの言葉の生まれる前のものだが）、このように明確に客体化された例はないのではないか。また、この曲は〝永遠〟と宇宙を結びつけた先駆けのような曲で、その後〝My Little Loverの「月の船」（akko／前田啓介　2009／11／18）では、「永遠のそばで光り続けている月の船は」と歌っている。（ただし、「月の船」という言葉自体は『万葉集』の柿本人麻呂の歌、「天の海に　雲の波立ち　月の船　星の林に　漕ぎ隠る見ゆ」を踏まえたものだろう。）あるいは、宇都宮隆の「Love chase　～夢を越えて～」（JIN／nisi-ken　2010／11／24）でも、「永遠が舞う宇宙（そら）で」と歌っている。特に後者は客体化した〝永遠〟について歌っているかに見えるが、果たして〝永遠〟が舞うかどうかは疑問である。

さらに、松任谷由実は1999年11月17日には「８月の日時計」（松任谷由実／松任谷由実）で「永遠がこわいから」と歌い、2004年11月10日には「永遠が見える日」（松任谷由実／松任谷由実）とまさに〝永遠〟をモチーフにした歌を作り、「その瞬間　永遠を見せて／一度だけの永遠を見せて」と歌っている。松任谷由実は、時間の長さを示す〝永遠〟にではなく、恋愛の意味の〝永遠〟でもない、まさに客体としての〝永遠〟を歌っているのである。ランボーが見つけた〝永遠〟と同じような〝永遠〟を現代の松任谷由実も歌っているのである。

この松任谷由実の歌の中で「永遠がこわい」と歌っていることにも注意したい。恋愛が永遠につづくなんて言う脳天気なことではなく、〝永遠〟というものを観念として捉えた時始めて「こわい」という捉え方ができるのである。そして、同じように〝永遠〟のこわさについて歌っている歌手にCoccoがいる。いささか先走りになるが、Coccoの曲についても触れておこう。これらもまた、観念としての〝永遠〟を歌っている曲の例示となるだろう。例えば、「玻璃の花」（Cocco／Cocco　2010／８／11）には次のようにある。

さぁ行こうか
行く宛無くとも
永遠を恐れ
戦くなかれ　バラよ
今日も朝一番に
会いに行くよ

「永遠を恐れ　戦くなかれ」とあるように、ここでも〝永遠〟は客体として捉えられている。因みに、Coccoの他の曲にも〝永遠〟がでてくる。1997年５月の「走る体」（こっこ／根岸孝旨）では、

目に写るものさえ壊れてく
見えない永遠など
私はこの手で
つくってゆく

と歌っていた。〝永遠〟を自分の手でつくるというのは、いかにも大胆な発想で

ある。ただ、Coccoの場合、〝永遠〟は恋愛に繋がるものだろう。「樹海の糸」（こっこ／柴草玲　2000／6／14）では、「永遠を願うなら　一度だけ抱きしめて」と歌っているし、「風化風葬」（Cocco／Cocco　2001／4／18）でも、「永遠だと言って愛してるって言って　枯れていく夢を　腕に抱いて感じて」と歌っている。

いささか例示としてはCoccoまで登場して脱線気味になったが、松任谷由実とCoccoは〝永遠〟について考察する上で特に注目すべき存在となろう。

Ⅲ

それでは具体的に曲を見ていくこととする。〝永遠〟を歌っている曲をいくつかのグループにまとめて紹介しよう。まず「見る」というもの、「見つける」「探す」というもの、そして、単に「ある」というもの、また「言葉」とか「知る」といったもの、その他として個性的な捉え方をしたものに分けて示すこととする。最初の二つは、ランボーの詩にあった「見つかった」に通じるものである。また「言葉」などは安室の曲に繋がるものである。とはいえ、ここではそれらの影響関係を調査しようとするものではなく、便宜上分けたにすぎない。

最初に、「見る」というグループ。発表順に挙げていこう。まずはＪ－ＰＯＰ以前の曲から。山下達郎の「永遠のFULL MOON」（吉田美奈子／山下達郎　1979／10／21）には〝永遠〟が２回出て来る。

〜

風にたなびく雲はやがて
夜の向こうで永遠へと変わる

〜

ねぇ聞いてよ　愛はMoon GloW
ねぇ聞いてよ　心Full Moon
Moon Beam　愛に差し込んで
Moon Beam　夜の向こうまで
Moon Beam　共に行き着くと
永遠が見える！

この最後の〝永遠〟は「共に行き着くと」とあって、やはり恋愛の行き着く先としての〝永遠〟という意味に解釈されるが、途中の雲が「永遠へと変わる」というのは、かなり個性的な〝永遠〟の捉え方である。また、標題とも係わってこの〝永遠〟も宇宙に繋がっている。また、山下達郎には「ヘロン」（TATSURO YAMASHITA／TATSURO YAMASHITA　1998／1／28）という、やはり宇宙に繋がる〝永遠〟を歌った曲がある。

〜

太陽のリボン
もう消さないで
いつかきっと

永遠をつかむ
その日まで

これは、この後の〝永遠〟をつかむというグループに入る曲ではあるが、この歌詞は恋愛とは結びつかないものであり、宇宙と繋がっている。しかし、「太陽のリボン」というのが何を指すのか解らず**（注２）**、〝永遠〟もまた大いなる何ものか象徴として歌われていて、〝永遠〟そのものを捕まえようというわけではなさそうなのである。さらに、山下達郎の「FOEVER MINE」（山下達郎／山下達郎　2005／１／19）では「さあ　くちづけして　堕ちて行こう　永遠の愛の静寂へ」と歌っている。これは「永遠の愛」のようだが、この前に「本当の愛の静寂へ」ともあり、「永遠」なのは愛ではなく、「愛の静寂」であり、単純に時間の持続としての〝永遠〟とも言えず、むしろ、時間から逸脱したという点では死に近いような〝永遠〟を示しているとさえ捉えられる。（無論、「愛の静寂」って何だ？という疑問もないわけではないが。）〝永遠〟は時間を超えるとことだが、時間から逸脱しているとも捉えられる。その場合は、ちょうど死と同じような意味になるのである。

「見る」という例に戻ろう。例えば、1990年４月21日の織田哲郎の「隠された道標」（織田哲郎／織田哲郎）。

生まれくる子供達に　何を伝えるのだろう
錆ついた幻想の中
目の前のパズルに惑わされないように
永遠を見つめて
いつかすべての閉ざされた扉が開く日を信じて

ここで歌われている〝永遠〟は少なくとも直接恋愛に係わるものではない。ただ、子供達とあるように大きな意味での愛に繋がるものだろう。ここでは〝「永遠を見つめて」とあたかも〝永遠〟が瞬間的なものではなく、持続的に存在するもののように歌われている。ただ、それは唐突で〝永遠〟のもつ意味を踏まえて歌っているとは思えない。

次に、HOUND DOGの「でっかい太陽～ JUMP JUMP JUMP ～」（大友康平・松井五郎／川島順一　1990／８／10）にも〝永遠〟が出ている。

〜

裸足のまま駆けてゆけ　永遠が見える
いますぐJUMP JUMP JUMP
いまよりも遠く
できるさJUMP JUMP JUMP
あの夏におまえを連れてゆく

この歌でも唐突に〝永遠〟が出て来るが、「あの夏におまえを連れてゆく」とあるので、ここでの〝永遠〟は恋愛を意味するもの、「永遠の愛」という意味と解釈される。愛が成就するすることの象徴として使われていると言ってもいいだろう。1994年５月25日のスターダストレビューの「Over The Rainbow」（寺田正美・根

本要／根本要）でも、「やっと見つけた永遠を抱きしめて　君と歩いてゆく」とあり、ここでは〝永遠〟と「君」が重なるような表現となっている。2002年7月24日の大江千里の「夏の指輪」（大江千里／大江千里）では、「僕らに永遠を見せて　信じられるものなどない」とあり、〝永遠〟が恋愛の成功の象徴であるという点は同じだが、こちらではそれに疑いを示しており、あるいは、こちらはまだ恋愛の途中ということなのか。

2006年1月25日のCORE OF SOULの「粉雪のきもち」（Fukko／Fukko・Ueda Gen）では、ほとんど〝永遠〟と恋愛は同じ意味になっている。

〜

なくしたくなくて
見失いたくなくて
怯える　その瞬間に
永遠が遠くなる
永遠が遠くなる

This is what I was borned for
溶ける瞬間に永遠が見えた　永遠が見えた

何が溶けるのかよく解らないが、これはランボーの詩にあった「海と溶け合う太陽」を踏まえたものかもしれない。

もう一つ最近の曲を紹介しよう。お中元（中孝介／元ちとせ）の「春の行人」（岡本定義／大橋卓弥・常田真太郎　2011／3／19）である。

霧晴れて春うらら
淡き恋の夢醒まし
遠き道を行く人の
忘られぬ面影よ

〜

散りゆくことを知りながら
花は何故咲くのでしょうか
移ろいゆく儚さに
永遠を見るのでしょう

ここでも「忘られぬ面影」とあって、恋愛に関係していることが示されるが、「移ろいゆく儚さに　永遠を見る」というのは、あまり例のない捉え方である。ここでも、「永遠に」というものが、時間の持続性を示すのに対して、観念としての〝永遠〟は、逆に一瞬のものだという捉え方が見てとれる。

Ⅳ

次に、〝永遠〟を見つけるようとするもの、探そうというものを挙げていこう。

何よりもまず最初に篠原涼子の「恋しさと　せつなさと　心強さと」（小室哲哉

／小室哲哉　1994／７／21）を挙げよう。

遠い空を　あの日　眺めていた
やりかけの青春も　経験もそのままで
永遠を夢見ていた　あの日を今
もう二度と繰り返さずに戻らずに生きること
出来なくて　あこがれて
でも少しずつ　理解ってきた　戦うこと!!

「CAN YOU CELEBRATE？」よりも３年近く前に、小室哲哉は〝永遠〟の出て来る歌詞を書いていた。一応、青春の憧れとして、漠然と〝永遠〟に対する憧れを歌っているとも解釈されるが、標題からしてもやはり「永遠の愛」の意味になるのだろう。

同じ年にMr.Childorenは独自の〝永遠〟を歌っていた。「Asia」（桜井和寿／鈴木英哉　1994／９／１）である。

傷跡だけ残った歴史の中から何を学んだの
煮え切らない僕にさえ何があっても譲れぬものがある
Oh　母なる愛のような　永遠を求めてる

標題に「Asia」とあるように、アジア全体を視野に入れた、かなりスケールの大きな歌である。この〝永遠〟は恋愛とは結びつかないものだが、「母なる愛のような　永遠」というものがどのようなものかは実はよく解らない。偉大なるもの、根源的なものの代替物として（象徴とは言えまい）〝永遠〟が使われているにすぎない。先の山下達郎と同様に時に〝永遠〟はジョーカーのように何にでも使われる傾向がある。

FILD OF VIEWの「DAN DAN　心魅かれてく」（坂井泉／織田哲郎　1996／３／11）では「この宇宙の希望のかけら　きっと誰もが永遠を手に入れたい」とある。ここにも宇宙が出て来るが、これは観念としての〝永遠〟を歌っているようだが、この後に「ほら君に恋してる」ともあって、やはり恋愛と結びついている。

布袋寅泰の「NOBODY IS PERFECT」（布袋寅泰／布袋寅泰　1999／５／12）。

夕日に染まりゆく　街並みをすり抜けて
もつともっと遠くへ　地球の果てまでも
空を羽ばたく　孤独な鳥のように
永遠を探しに行こう
〜
NOBODY IS PERFECT
そして誰もが
愛を求めて
今日も生きてる

ここでも歌詞の最後を見ると〝永遠〟は恋愛の意味と考えられる。また、「地球の果てまでも」というのは、宇宙よりもランボーの詩の世界に近いだろう。太陽と

海は地球にしかないのだから。それは〝永遠〟のイメージが時間的なものから空間的なものに広がり、その最たるものが先に触れた宇宙ということになるのだろう。また、空間ということでいえば、杏子には「永遠という場所」（杏子／山崎将義 1999／5／12）という曲があり、題名もそうだが、歌詞の中にも「永遠という場所に行きたい」と歌っている。〝永遠〟が場所というように限定して歌われている珍しい例である。しかし、「永遠という場所」などあるはずもないのだが。

もう一つ、比較的新しい例を挙げよう。かりゆし58の「サマーソング」（前川真悟／前川真悟　2010／8／11）である。ここでは、「追いかけてくるのは思い出 追いかけているのは永遠」と歌われている。この場合の〝永遠〟もまた恋愛を指していると考えられる。

次に、「ある」という例。氷室京介「永遠～ Eternity ～」（森雪之丞／氷室京介 2000／1／15）。

胸をナイフで裂いて
その手で心に触れればいい
せつなさの海に満ちる
永遠がそこにある
〜
愛しき嘘を投げて
嘆きの深さを測ればいい
永遠はそこにある

題名も「永遠」というこの曲の〝永遠〟はやはり恋愛に繋がるものだろうが、「永遠がそこにある」というのが、何を意味しているのかはよく解らない。

松田聖子も「I Miss You」（Seiko Matsuda ／ Shinji Harada　2001／11／28）で〝永遠〟を歌っている。

〜
永遠があるのなら　このままで
見つめあい　すべてを失くしても……
永遠を信じてる　二人なら
嵐の中でさえ　生きていける

これに続けて、〝永遠〟は4回ほど出て来るが、愛情を示すものでしかない。むしろ、ここでも〝永遠〟は何でもかなえるようなものとして歌われている。特に〝永遠〟という言葉の意味を踏まえたものではなく、〝永遠〟はいわばジョーカーのようになんにでも代替されているのである。

さらに、〝永遠〟という言葉、というものや、「知る」というものも挙げておこう。大江千里の歌詞には〝永遠〟が多く登場するが、「This Christmas」（大江千里／大江千里　2002／11／7）では、「君に出会った瞬間に　感じていた想いがあるよ 永遠という　言葉の意味に　僕は気付いた」と歌っている。この〝永遠〟は完全に恋愛の意味である。

彩香の「手をつなごう」(彩香／西尾芳彦・彩香　2008／３／５)はあたかも「CAN YOU CELEBRATE ？」を受けて歌われているかのようである。

永遠というコトバって　あるのかな？
未来を想うと　怖くなるけど
ずっとずっと　続く夢があるから
手をつなごう

もう、〝永遠〟という言葉は信じられなくなりつつあるということか。(それが「コトバという表記になるのだろう。)

柴咲コウの「幸せ繋いでた糸」(柴咲コウ／市川淳　2009／３／４）では、「かけがえのないものに出逢い　永遠を知る」とあり、典型的な〝永遠〟と恋愛の結びつきを示すものとなっている。順番は前後するがゴスペラーズも「或る晴れた日に」（村上てつや／村上てつや　1998／８／21）で「東の空へ　東の門へ　あなたのもとへ向かっているから　いつかどこか　或る晴れた日に　永遠を知る」と歌っている。「あなたへと」とあるようにこれもまた恋愛と結びついた〝永遠〟である。(因みに、ヴィンセント・ミネリ監督「或る晴れた日には永遠が見える」－1970年－という映画もあるが。)

最後に個性的な〝永遠〟の捉え方をしている曲をいくつか挙げよう。まず、大貫妙子の「黒のクレール」(大貫妙子／大貫妙子　1891／10／21）では、「いつか風にくちてしまう　思い出も港も　走り去った時の中で　夕映えが永遠を映す」と歌っている。「夕映え」と〝永遠〟の繋がりはランボー的ではあるが、むしろ「夕映え」そのものが〝永遠〟へと繋がっているものではないか。「映す」というのがどういう事か解らない。次に、中谷美紀の「鳥籠の宇宙」(中谷美紀／坂本龍一　1997／９／26)。

〃

足りない笑顔　とどかない爪
錆つきそうな愛　永遠の砦
遠い瞳をした　小さな歌声（ささやき）
呼吸を乱す　不安まじりの雨

永遠を思って　叶わぬふたりの夜は
かかとを地につけて　凍えるつま先を休めてた

これも恋愛と繋がった〝永遠〟ではあるが、「永遠の砦」というのが、どのようなものなのか。「永遠の」「砦」なのか、砦が〝永遠〟なのか。しかし、〝永遠〟でつくられた砦とは想像もつかない。

矢沢永吉も「永遠のひとかけら」(加藤ひさし／矢沢永吉　1999／８／６）という曲を歌っており、「今も光る　君といた季節　永遠のひとかけら」とある。これも恋愛に繋がったものだが、それにしても「永遠のひとかけら」とは何だろうか。愛のひとかけらということだろうか、それでも解らないけれど。

もう一つ、Fiction Junctionの「花守の丘」（梶浦由記／梶浦由記　2009／2／25）を挙げよう。

丘を染めた白い花が
咲き誇る夏には
貴方といたこの日々を
思い出すでしょう
〜
最後の光を惜しむように
暮れゆく大地が優しい声で
永遠を歌い出すまで
〜
永遠を語りましょう
貴方の愛した未来を

これも恋愛と繋がっているが、「大地が優しい声で　永遠を歌い出す」というのがユニークである。〝永遠〟を歌い出すことはないだろうけれど、ランボーの太陽と海と大地とは近しいイメージであることは確かだ。

V

〝永遠〟を歌ってる曲について紹介してきたが、実は〝永遠〟はない、と否定している曲も多くある。これは、〝永遠〟そのものの否定というよりも、恋愛は〝永遠〟ではなかった、〝永遠〟にはつづかなかったという意味のものが多い（何を今更、というようなものだが）。しかし、その中に観念としての〝永遠〟を踏まえて否定していると解釈できるものもある。それらの曲もいくつか紹介していこう。

まず、その中でも一番強烈なのは、THE BLUE HEARTSの「情熱の薔薇」（甲本ヒロト／甲本ヒロト　1990／7／25）だろう。この曲ではいきなり「永遠なのか本当か」と歌い出される。否定というよりは文字通り疑問なのだが、何を「永遠なのか」と言っているのか解らない。しかし、〝永遠〟という言葉が強力に印象づけられる。ただ、この後に「時の流れは続くのか」あって、時間の持続ということの〝永遠〟と言う意味で使っているとも解釈される。

次に、最初にも触れた浜崎あゆみの「Love ～ Destiny ～」（浜崎あゆみ／つんく　1999／4／14）である。

ねえ　本当は　永遠なんてないこと
私はいつから　気付いていたんだろうね

この歌はつんくとのデュエットであり、これにつづく歌詞からこれも恋愛が「永遠に」つづかないという意味だと解るのだが、これが歌い出しのために〝永遠〟という言葉が印象づけられ、客体としての〝永遠〟としても受け取れるのである。この曲が、平成の歌姫と呼ばれる浜崎あゆみの歌ということを考えると、Ｊ－ＰＯＰにおける〝永遠〟は1997年に始まって、1999年には終わってしまったと言っても良

いような気さえする。（これは、この浜崎の曲を聴いた時に、どれだけの人が「CAN YOU CELEBRATE ？」などを思い出したか、ということでもある。多分ほとんどいないだろう。だから、その後も〝永遠〟を歌う曲が書かれることになるのだが、筆者はこの曲を聴いた時安室の曲を思い出したのであり、畢竟それが本稿を書くことに繋がっているということなのである。）

さらに、明らかに先のランボーの詩を踏まえたと思われる曲もある。矢井田瞳の「Everything is In Our Mind」（Yaiko ／ Yaiko 2000／10／25）である。

永遠を見たことがあるの？

〜

空と海が溶け合う場所

この「空と海の溶け合う場所」というのは、言うまでもなくランボーの詩を踏まえたものである。しかし、かつてランボーが「見つけた」と言ったものが、ここでは、「永遠を見たことがあるの？」と疑問形になっている、というよりも〝永遠〟というものが本当にあるのかと、否定的なニュアンスの問いにさえなっているのではないか。

くるりの「永遠」（岸田繁・佐藤征史／くるり　2001／２／21）ではもっと単純に〝永遠〟を否定している。

永遠はNothing　永遠はNothing

「永遠」という題の歌だが、そこでは「Nothing」と否定されている。一応、恋愛には関係しない〝永遠〟ではある。

平井堅の「LIFE is…－another story-」（Ken Hirai ／ Ken Hirai　2003／５／８）は恋愛に係わるものだが、〝永遠〟が強く印象づけられる。

〜

永遠は何処にもない
誰も触れることはない
でも君が笑うとその先を
信じてみたくなる　手を伸ばしたくなる

「何処にもない」、「誰も触れられない」という言葉からは、客体としての〝永遠〟について言っているように聞こえる。否定であっても、〝永遠〟の本質を捉えている。ただ、その先で「君が笑うと」とあって、これもまた愛情の永遠について歌っているとも思われる点もあって、確実にそうだとは言えないところもあるが。

さらに、浜崎貴司の「くちづけ」（浜崎貴司／浜崎貴司　2004年２月）。

お願いだから　くちづけを下さい
私には今だから　言える言葉があるの
世界には永遠は見あたらず
何もかも年老いて移ろう儚いものだから

〜

永遠じゃなくていい　永遠のふりでいい

瞳にあなたを残したまま

この〝永遠〟は「何もかも年老いて」とあるように、時間を超えたものとしての〝永遠〟を指していると解釈できる。ただ、「永遠じゃなくていい～」というのは、やはり恋愛における〝永遠〟ということになるだろう。

スピッツの「桃」（草野正宗／草野正宗　2007／10／10）では「永遠という戯言に溺れて」とあり、〝永遠〟がない、というのではなく、「戯言」にすぎないとしている。これはまた、愛もまた「戯言」ということなのだろう。

もう一曲Aqua Timesの「別れの詩－still connected-」（大志／大志　2009／3／11）を紹介しよう。

永遠なんてどこにも　ないことなんかわかってるけど
「あったらいいなぁ」って　笑うあなたの横顔忘れられない

〝永遠〟は何処にもないと否定されているけれど、同時に〝永遠〟に対する憧憬も歌われている。無論、この〝永遠〟も恋愛に繋がるものではあるが。

最後に、〝永遠〟の否定というよりも、まさになれの果てというべき曲を紹介しよう。これはまだＣＤになっていないが、出光興産のコマーシャル・ソング（伊藤公一／キセル）である。当初は寺尾紗穂が歌っていた。

永遠を信じるほど
無邪気には　なれないけれど
あぁどうかこの幸せ
ずっと続きますように
それは切ない祈りにも似て
人はその手を空に差し伸べる
吹く風に負けないように
深い森に迷わぬように
握ったこの手　離さないで
もう二度と　離さないで

これも恋愛についての歌だが、もう愛は〝永遠〟だなんて事は最初から望まずに、せめてずっと続いてくれればよい、ということなのである。藤川氏が刹那的と指摘していたが、現在では、むしろ、より現実的になりつつあるのかもしれない。（それは人々が、ということか、それとも歌というものがロマンティックでなくなったということなのか、いやどちらもということなのだろう。）また、ここではいわば〝永遠〟があるというのは、信じることだといっている。もう、〝永遠〟は客体として存在するのではなく、信じることによってのみ存在するということになる、しかも、信じるのは「無邪気」だとされている。ランボーが〝永遠〟を見つけたというのは無邪気すぎるということであり、同じような〝永遠〟を見てみたいということさえなくなってしまったということなのだろう。まさに、これこそ〝永遠〟のなれの果てなのではないだろうか。

V

Ｊ－ＰＯＰにおける〝永遠〟の用例、それも観念としての〝永遠〟として捉えられる用例についてみてきた。実際にはっきりと観念としての〝永遠〟を歌っていると言えるものは少なかった。むしろ、その多くは恋愛に係わるものであった。それも恋愛の成就の象徴として使われたものであった。あるいは、何か大いなるもの、憧れるものの代用としてジョーカーのように使われていた。〝永遠〟という言葉の本来の意味を踏まえずに、なにかしらおしゃれな言葉として使われていたということである。この点では、ランボーの詩から、なんとも遠くへ来たものだという感もある。ただし、本稿ではなにもランボーの詩がＪ－ＰＯＰの〝永遠〟の元であったなどという影響関係について述べるつもりは最初からなく、実態を調査したに過ぎない。そのため、これらの曲を、年代や、歌手、もしくは作詞家などによってまとめる事などもしなかった。また、むしろ、注目したいのは作った側ではなくて聞く側であり、個々の曲についてどのように感じたかを知りたいのだが、現時点ではとてもそのような研究はできない。そのために結果として使用実態の見取り図のようなものを提示するにとどまったということである。まあ、6,500曲を相手にするのはなかなか困難であったということでもあるが。

むしろ、ランボー的〝永遠〟を歌った曲を見つけられたことの方が僥倖とでもいうべきであった。矢井田瞳の「Everything is In Our Mind」のようにランボーの詩を踏まえて書かれた曲もあった。また、松任谷由実の曲にははっきりとランボー的〝永遠〟に通じるものがあったし、Coccoにもあった〝永遠〟を恐れるというのも〝永遠〟を客体化して捉えたものとしてとらえられる。その他にも、山下達郎の「永遠のFULL MOON」の「風にたなびく雲はやがて　夜の向こうで永遠へと変わる」や、Fiction Junctionの「花守の丘」の「暮れゆく大地が優しい声で　永遠を歌い出すまで」などの独自の捉え方をしたものもあった。さらには、宇宙と結びついたものなどは現代ならではかもしれない。また、「永遠なんてない」と〝永遠〟を否定する曲の方が〝永遠〟が強く印象づけられるのは興味深い。「ない」とわざわざ否定する裏には、〝永遠〟に対する強い憧れがあるからだとも推測できるが、前述のようにそのような考察はまた稿を改めて行うこととしたい。

何はともあれ、たとえなれの果てであろうと、ランボー的〝永遠〟がいまだに歌い続けられていることは確かであり、それを確認することができれば、本稿の目的は達成されたようなものなのである。そして、多分この瞬間にもまた新たな〝永遠〟が歌われているだろう。

注

（1）ポピュラーミュージックにおける「作品」や「作者」という概念の困難さについては、増田聡氏が『その音楽の<作者>とは誰か－リミックス・産業・著作権』（みすず書房　2005年７月）で、クラッシック音楽などと違いその定義

が困難であることの指摘をしているので、参照していただきたい。

（2）「太陽のリボン」について、コロナ質量放出やそれより小さい太陽フレア、またフィラメントの爆発などで太陽表面にリボン状のものが見え、それを「太陽のリボン」という場合もある。